

志木市の文化財 第4集

西原・大塚遺跡発掘調査報告

1 9 7 5

志木市教育委員会

序

人類の祖先が地球上に生体として発生したのは、何億年の過去か知ることは不可能に近いと思う。しかし、他の動物に比較し、次第にその生活の様相に差異が起り、いわゆる人類だけが可能に出発した「文明のおけぼの」は人類学者の研究が進むにつれておよそ二百万年ぐらい以前ではなかろうかとの推定が認められているようである。

これは、人類学者の研究のみでなく、考古学者、生物学者等による総合的な研究の結果からの推論的な断定である。それによってわれわれの祖先が、純然たる動物としての存在から次第に進歩して、自然を克服し、又は利用し、計画的な人間らしい生活形態を歩んだ跡が、現代に至るまで、いろいろな姿で地球上に残されていることが明らかにされつつある。

人間的な生活を営む上での用具の開発は、生活様式を変えることの大きな原動力となったにちがいない。草木、獣皮、獣骨、石器、土器、鉄器等は人間生活をますます向上させて、今日の文明社会を招致するのに、大いに役立った。

現在、日本の各地に残存するそれらの遺物、遺跡から推して、いわゆる縄文式文化（縄文式土器、竪穴式住居）の発生は紀元前8000年ぐらいの太古であろうとされている。当志木市にも志木中学校の近くに貝塚があり、富士見市水谷から新座市大和田へかけての低地が古代東京湾の入江で、宗岡地区が遠浅であった頃、この地の先住民族が魚貝を採集して食料に供し、その残滓を捨てた遺跡であると、かねてから話題になっていた。そこで文化財保護委員を初め考古学に関心を持たれる方に依頼して、昭和48年に西原台地、昭和49年に志木中学校庭の発掘調査を実施したところ果せるかな、縄文期から古墳時代前期に及ぶ竪穴式住居址が出土し、そこで発見された、土器等から、当市に於ても先住民族の生活が、古代の海岸線の縁辺に、かなり広範囲にあたって展開されていたことが立証された。

この冊子は、特に発掘の成果が高い西原地区の場合について、調査の内容を記録として詳細にまとめたものである。関係の方々に対し深く感謝すると共に、これを契機に、この種の問題に意のある多くの方々からの批判、指導、協力により、この結果が深化、拡大することを期待してやまない。

昭和50年3月

志木市教育委員会教育長

金子俊一

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市幸町3丁目に所在する西原・大塚遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 調査は、志木市教育委員会が、昭和48年8月3日～8月12日に実施したものである。そして、調査には、主に志木市郷土史研究会、県立朝霞高校社会部、市文化財保護委員会が従事し、その他、埼玉大学考古学研究会の参加を得た。
3. 本報告書は、井上国夫、落合静男、谷井彪、宮野和明が分担執筆した。
4. 出土品の整理等は、朝霞高校社会部員の協力を得、図版作成は執筆者がこれにあたった。
5. 本書の編集は、主に執筆者があたり、萩元家義氏の助力を得た。
6. 発掘調査期間中、地主、
氏をはじめ、多くの方々にお世話になった。感謝の意を表したい。

発掘参加者

担当者 宮野和明

市文化財保護委員

池ノ内好次郎

萩元家義

服部一次

根岸正文

志木市郷土史研究会

井上国夫

肥沼正和

小畑包美

高橋長次

川又正則

高橋裕美

埼玉大学生

並木隆

笹森健一

井上肇

埼玉大学OB

谷井彪

県立朝霞高校社会部

顧問 中川列

部員 五十嵐繁雄 藤野明子

小林賢一 棚沢裕子

斉藤恵子 遠藤泰子

高橋桂子 堀口圭子

金子直行

前田次郎

内田伸一

志木市教育委員会事務局

森士郎

鈴木重光

落合静男

目 次

序

志木市教育委員会教育長 金子俊一

例 言

1	西原・大塚遺跡の立地環境	1
2	調査に至るまでの経過	3
3	遺構	4
	1 住居址	4
	2 土壌	8
4	出土遺物	12
	1 土器	12
	2 石器	28
5	まとめ	31

挿 図

第1図	西原大塚遺跡の位置	第9図	第1号住居地出土土器実測図
第2図	発掘調査参加者写真	第10図	第1号住居地出土土器拓影図
第3図	発掘調査全測図	第11図	西原・大塚遺跡出土土器実測図
第4図	第1号住居址実測図	第12図	第3号住居址出土土器拓影図
第5図	第2号住居址実測図	13	
第6図	第3, 4号住居址実測図	14	
	第5A・5B住居址実測図	第15図	第5A・B号住居址出土土器拓影図
第7, 8図	土壌実測図	第16~19日	土壌出土土器拓影図
		第20~21図	石器実測図

図 版

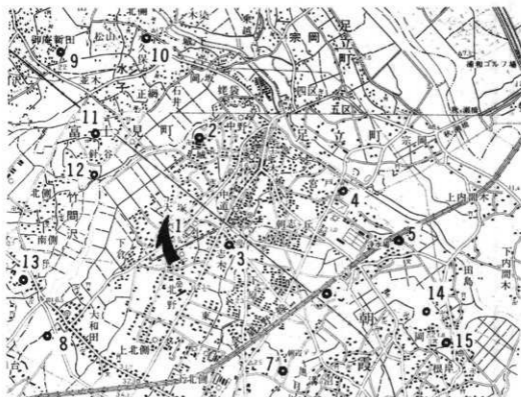
図版Ⅰ	第1, 3, 4, 号住居址, 7号土壌写真	図版Ⅱ	第5A, B号住居址, 5号土壌写真
図版Ⅲ	住居址出土土器写真	図版Ⅳ	住居址, 土壌出土土器写真

1. 西原・大塚遺跡の立地環境

西原・大塚遺跡は、埼玉県志木市幸町3丁目8番地周辺一帯に所在する。

遺跡は東武東上線志木駅より北西約1kmほど離れたところにあり、遺跡の周囲は畑地が多く残されている。しかし、遺跡の南約300mのところに通称防衛道路が東西に走り、道路に沿って、工場が立ち並び、また、最近、団地、マンションが建ち、都市開発の波が押し寄せている場所でもある。

西原・大塚遺跡は、武蔵野台地東縁に当り、東に新河岸川、荒川、南に黒目川、北に柳瀬川の開折谷に囲まれ、東に伸びた、舌状台地上にある。遺跡は、北に柳瀬川の沖積低地を臨み、低地との比高は7～8mを測る台地縁辺に位置する。



第1図 西原・大塚遺跡の位置

1. 西原・大塚遺跡
2. 志木中橋内遺跡
3. 富士塚（大塚古墳群）
4. 宮戸遺跡
5. 浜崎遺跡（浜崎古墳群）
6. 西久保遺跡
7. 泉山水遺跡
8. カミ遺跡
9. 打越貝塚
10. 水子大応寺前遺跡
11. 北通遺跡
12. 南通遺跡
13. 新座遺跡
14. 岡の城山貝塚
15. 袴塚古墳

この遺跡をのせる台地は、東西に幅2kmあり、ほぼ平坦で、台地周縁には、縄文から各時期にあたる遺跡が集中しており、数年前に実施した県の遺跡分布調査に於いても濃密な遺跡の分布が確認されている。今回調査した西原・大塚遺跡もそのうちの一つである。

さて、西原・大塚遺跡の周辺の縄文中期および古墳時代前期の遺跡をみってみる。

縄文中期の遺跡としては、この遺跡の北東約1kmにある城山遺跡(注1)、台地南端の黒目川流域の嵯峨山遺跡(注2)、その下流にある泉水遺跡(注3)、西久保遺跡(注4)、また本遺跡の北対岸の台地上にある新座遺跡(注5)、谷津遺跡などこの地域では多数みられる。

本遺跡に関連して、古墳前期遺跡としては、西原・大塚遺跡周辺に、十数年前まで古墳が多数あり、大塚古墳群(注6)として表記されていたが、都市開発でほとんどが破壊されてしまい、地名にだけ大塚(多塚)、双塚として残されている。しかし、わずかに富士塚(注1)、塚の山古墳、新座市大塚古墳が残存している。

最後に、その他この地域の各時期の遺跡を概観すると次のとおりである。

旧石器時代後期の遺跡として、黒目川流域にある新座市市場坂遺跡(注7)がある。縄文前期の遺跡として、本遺跡の北約3km離れたところに水子大応寺前貝塚(注8)、また、富士見市打越貝塚(注9)、新座市内畑遺跡(注10)などが知られている。縄文後晩期になるといくつか調査例はあるが少なくなる。

弥生時代および古墳時代に複合した遺跡として、朝霞市の泉水遺跡(注3)、浜崎遺跡(注11)、西久保遺跡(注4)などが存在している。(井上国夫)

注1 志木市教育委員会 「志木市の文化財」第二集 1972

注2 滝沢 浩 「埼玉県嵯峨山遺跡の中期縄文土器」 考古学手帖18 1963

宮野和明 「嵯峨山遺跡」 遺跡発掘調査報告会第4回発表要旨 1971

注3 早川智明、青木義緒 「泉水遺跡発掘報告」朝霞の文化財第二集 1965

井上 肇 「朝霞市泉水山遺跡の調査」 遺跡調査報告会第7回発表要旨 1974

注4 広島六郎太 「第二西久保遺跡発掘報告」 朝霞の文化財第4集 1973

注5 坂詰 秀一 「新座」 1965

注6 埼玉県教育委員会編 「古墳調査報告書」 第7編—北足立地区— 1964

注7 滝沢 浩 「埼玉県市場坂遺跡—関東地方におけるナイフ形石器文化の一様相」 埼玉考古 第2号 1954

注8 東京考古学会水子貝塚研究分科会 「埼玉県入間郡水谷村水子大応寺前貝塚調査報告」 考古学11—2 1940

注9 和島誠一、小泉功ほか 「水子、打越貝塚、鶴馬宮脇遺跡発掘調査報告」富士見市教育委員会 1969

富士見市教育委員会編 「打越遺跡調査報告」 1974

注10 谷井 彪 「内畑遺跡発掘調査報告」 埼玉県遺跡調査会報告第7集 1970

注11 谷井 彪、下村克彦 「浜崎遺跡発掘調査報告」 埼玉県遺跡調査会報告第10集 1970

2 調査に至る経過

志木市における都市化の現象は年々激しくなり、市内のほとんどが市街化区域に指定されている。現在、市内に8ヶ所の遺跡を確認しているが、その一つ縄文時代の集落址として注目されている西原・大塚遺跡は区画整理事業の対象と考えられているところであり、また、将来、住宅地域として変貌を余儀なくされる場所である。

市教育委員会では、この状況に対処し、宅地造成以前に、この西原・大塚地区の集落址の様相を確認するため、発掘調査を昭和47年度に計画した。しかし、十分の予算の裏付けを持つことが不可能であり、とりあえず、小範囲を詳細にできる限り、完全に調査する方針をとった。

市教育委員会は、地主の 〇〇 氏の協力を得、文化財保護委員会と協議して、発掘調査の準備にとりかかった。

調査は、昭和48年5月に予備調査を行ない、遺構の確認をした。そして、昭和48年8月3日から8月12日の10日間、志木市郷土史研究会、県立朝霞高校社会部の協力を得て行なわれることになった。

真夏の炎天下、汗と泥にまみれてのつらい調査ではあったが、研究意欲に燃え、予想を上まわる成果をあげることができた。

調査にあたっては、地主の 〇〇 氏の協力はもとより、多くの方々から調査の協力、援助を受けた。心から謝意を表する次第です。（宮野和明）



第2回 発掘参加者

3 遺 構

1 住居址 (第3図)

今回、発掘調査によって発見された住居址は6軒である。

30m×15mの小範囲を
発掘調査した結果、縄文中期勝
坂期～加曾利EⅡ期に亘る時期
と、古墳時代前期五領式期の住
居址とが確認できた。

集落址の全貌を把握するには至ら
なかったが、集落の規模はかな
りの大きさを持つものと思われ
る。なお、集落址の形、規模に
ついては、今後の継続調査に待
ちたい。

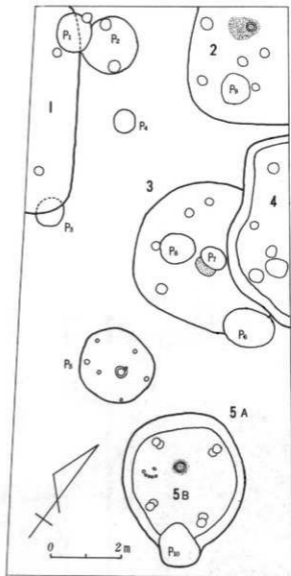
次に、今回・調査した個々の
住居址について、以下、概述す
る。

第1号住居址 五領期 (第4図)

住居址の西半部が調査区域外
にあつたため、未調査部分を
残し、全容は明らかにされてい
ないが、推定、長辺、5.7mの
規模を持つ、隅丸方形の住居址
である。壁高32cm、壁溝はめ
ぐっていない。床面は堅い。

柱穴はP1、P2が主柱穴に
相当する。

この住居址は火災で焼け落ち
たままの状態にあつたようで、
床面に接して炭化材がまとまっ
て発見された。いずれも、住居



第3図 全体測量図

址中央部に向かって造られていた。覆土からの出土土器は、小型台付甕、壺形土器の他に若干の縄文中期と土師器片が認められた。なお、この住居址は土壁と切り合い、土壁をこわして構築されたようだ。

第2号住居址 加曾利EⅡ期

(第5図)

住居址の東側部分は農道にかかり、全堀できなかったが、平面形は、隅丸方形を呈すると思われる。壁高は12cm～14cmを測り、周溝は認められない。

床面は一部良好な中央部を除き、かなり攪乱を受け、壁の判定には苦慮した。

炉址は南壁から2.50m離れたところろにあり、床面を10cm程掘りくぼめ、底部を欠いた土器を埋設している。炉体土器の内側、土器周囲に焼土が顕著に認められた。

柱穴はP1、P2が深さ一4.7cm、一6.5cmで、深さからして、4本の主柱穴の2本と思われる。

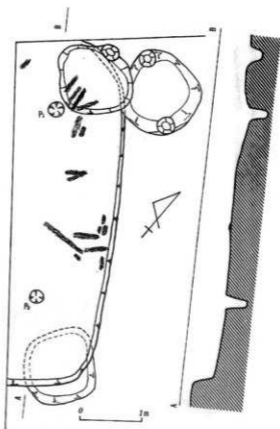
遺物は、覆土から縄文中期の土器片が少量出土した。

この住居址の炉体土器と同様な範例は多く、所沢市膳棚遺跡第13号住居址、など多数の調査例がある。

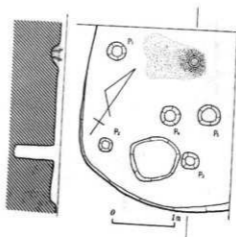
第3号住居址 加曾利EⅢ期

(第6図)

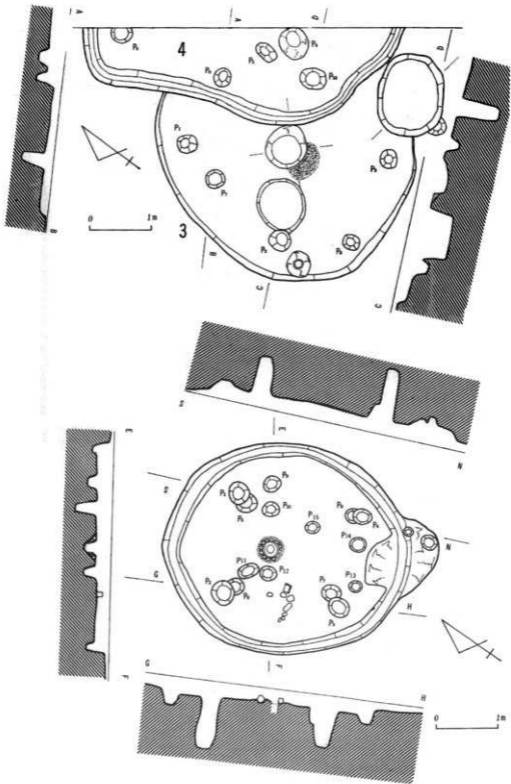
東側部分は4号住居址と切り合っている。本住居址に張り床が認められないところから4号住居址よりも時間的に古く、4号住居址に切られていることがわかった。



第4図 第1号住居址実測図



第5図 第2号住居址実測図



第6图 第3、4号住居址、第5A、B住居址实测图

長径4.3cm(推定)、短径4.1cmの不整形円形を呈する。

壁の立ち上がりは差程明白でない北側壁を除いて、壁面はしっかりしているが壁高6cm～12cmの浅い住居址である。床面は全体的に堅くしまっている。炉址は住居址のほぼ中央部にあり、円形の地床炉である。しかし、炉の半分は集石を伴う土壌に切られていた。

柱穴は壁に沿ってめぐり、比較的深い、P1～4の4本が主柱穴と思われる。

南西側の壁に接して、埋薬が発見された。胴下半部を欠いた土器が、浅いP11に埋め込まれていた。

出土遺物は、P4の脇に小型の甕、炉址の南に大型の浅鉢が発見され、覆土から多量の土器片が出土している。その他、磨製石斧も出土している。

第4号住居址 加曾利EⅢ期 (第6図)

住居址の東側は農道にかかったため、住居址の大部分の調査に終った。調査部分から推定すると住居址の平面形は五角形ないしは六角形を呈するものと思われる。

この住居址と前述した3号住とは複合しているが、壁に沿って壁溝がめぐらされている。

床面はほぼ平坦で、全体的に堅くしまっている。

炉は調査区域からはずれているとみえ、確認することができなかった。

柱穴は、3号址と切り合っている部分では、どちらの住居址の柱穴か所属がはっきりしないが、3号址の柱穴よりも概して深いP9、とP10がこの住居址の柱穴とみられる。

遺物は覆土より、小型壺形土器を出土した。その他土器、石器の出土量は少ない。

第5A・5B号住居址 扇坂期 (第6図)

この5号住居址は一度建直しが行われた可能性の強い住居址である。柱穴の重きなりや、柱穴の位置、そして、炉が2ヶ所に存在し、更に炉のレベルの差からみて、時間的に連続した二時期の生活面が考えられる住居址である。5号住居址の新旧を考えて、5Aを新、5Bを旧と想定した。

5A住居址は、長径3.9m、短径3.6mの橢円形を呈する住居址である。壁面に沿って壁溝がめぐっている。南東部は浅い土壌に切られている。壁高22cmを計る。床面は平坦であり、堅くしまっていた。しかし、約50cmの間隔で溝状にごぼう溝によって破壊され、保存状態が良好とは言えなかった。

炉址は西に偏り、壁に近い位置にある。ごぼう溝で一部を壊され、推定60cm×30cmの直方形の石囲い炉である。焼土はわずかに炉石の周囲に残され、焼土の堆積は顕著でなかった。

柱穴はP1～P4の4本が主柱穴と思われる。この4本に対応して、P5～P8が重複している。幾分広げられたP5～P8の柱穴が、建直しの時の柱穴と思われる。

5Bの住居址の規模は不明であるが、主柱穴P1～P4の位置からして建直し後の5Aと大差のないものと考えられる。

5Bの炉は住居址のほぼ中央に位置し、床面より下に埋った状態にあった。床面を掘り凹め、中に炉体土器を置き、土器の周囲を小石で囲っていた。炉の直径は35cmあり、炉体土器の口縁部は人為的に壊して、埋められていた。焼土は若干残っていた。

出土遺物は土釜、打製石斧の他、土器片が多量に出土した。

この住居址と同様な建直しの可能性のある例として、所沢市膳棚遺跡8、12号住居址、などがある。

(宮野和明、井上国夫)

2 土 境 (第3図 P1~P10)

今回、発掘調査した範囲から10ヶ所の土境を確認した。土境同士の切り合いは少なく、住居址と重複している土境が比較的多かった。

本遺跡の土境を覆土の堆積状態、集石の有無、埋設土器を伴うかにより3つに分類して、以下各境を概述する。

1 覆土が単一の土境

土境3 (第7図 P3)

平面形は、長径1.3m、短径1.2mで隅丸方形を呈する。覆土は褐色土で、勝坂、阿玉台、加曾利EⅢ期の土器片を数片出土した。なお古墳時代前期の第1号住居址と重複している。

土境4 (第7図 P4)

平面形は直径1.2mで不整形円形を呈する。覆土は褐色土で加曾利EⅡ期の土器片を数片出土。

土境8 (第7図 P8)

平面形は直径85cmで円形を呈する。覆土は褐色土で、勝坂、加曾利EⅢ、Ⅵ期の土器片を若干出土した。この土境は第3号住居址と重複している。

土境9 (第7図 P9)

平面形は長径80cm、短径70cmで不整形円形を呈する。覆土は黄褐色土で出土遺物は無かった。この土境は第2号住居址と重複している。

土境10 (第7図 P10)

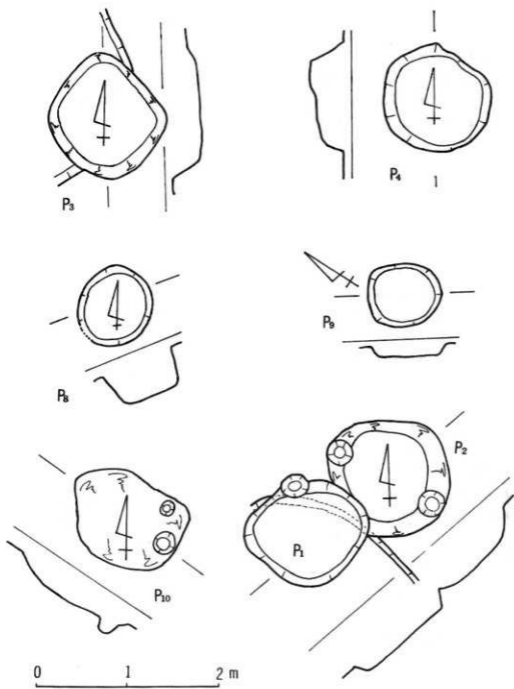
平面形は長径1.3m、短径95cmで不整形円形を呈する。土境の東側に偏って2つのピットが掘られている。覆土は褐色土で出土遺物はない。この土境は第5A住居址と重複している。

土境1 (第7図 P1)

平面形は長径1.4m、短径1.1mで楕円形を呈し、古墳時代前期の第1号住居址と重複している。また土境2とも切り合っている。覆土は褐色土で、勝坂、加曾利EⅠの土器片を若干出土した。土境の壁の立ち上がり部分にピットが1つ掘られていた。

土境2 (第7図 P2)

平面形は直径1.4mで円形を呈し、土境1と切り合っている。覆土は褐色土で、勝坂、加曾利



第7回 土壇 1、2、3、4、8、9、10 実測図

EⅢ期の土器片を数片出土した。土壌の東西に2つのピットが掘られていた。

Ⅱ 集石を伴う土壌

土壌7 (第8図 P7)

第3号住居址と重複した土壌で、3号住居址の炉を切って作られていた。また、第4号住居址と接している。平面形は直径1.4mで円形を呈する。覆土は上層に黒褐色土、下層に褐色土の二層に分かれている。土壌の底面に河原石が集中して、密に敷かれ、どの石も焼かれた形跡が認められた。しかし焼土は見られなかった。覆土から加曾利EⅡ期の土器片が若干出土した。

Ⅲ 埋設土器を伴う土壌

土壌6 (第8図 P6)

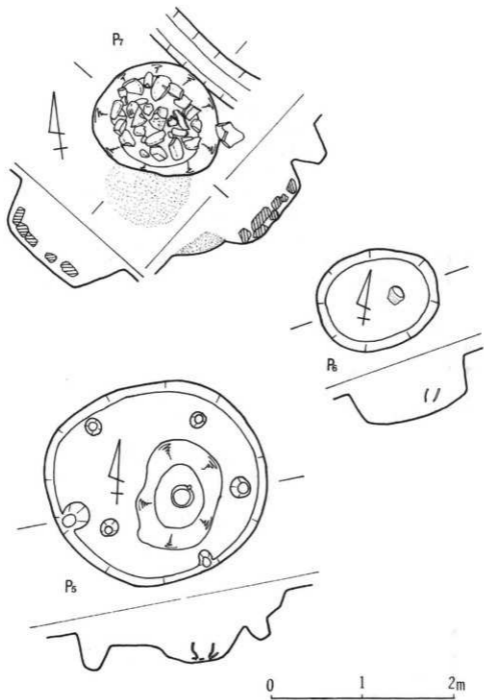
第3号住居址と切り合っている。平面形は長径1.3m、短径1.1mで楕円形を呈する。覆土は底面まで一様に黒褐色土である。阿玉台、加曾利EⅢ、Ⅳ期の土器片を出土した。また底面より10cm程上層に底部を欠いた加曾利EⅢの深鉢が斜めに埋設されていた。

土壌5 (第8図 P5)

この土壌は今回調査した土壌群の中で、一番規模の大きいものである。平面形は長径2.4m、短径2.2mで楕円形を呈し、一旦掘り下げた後、土壌中央部を更に掘り下げ、凹みを作っている。凹み部分に波状口縁に橋状把手のついた加曾利EⅣ期の深鉢形土器を埋置していた。この土器は、胴下半分を欠き、欠いた部分を別の土器片で下から組み込ませてあった。

また、上段の面には規則的に、土壌内周囲に6つのピットがめぐらされている。しかも、ピットは、土壌の内側に傾斜して掘られていた。このことから、ピットは柱穴として掘られ、上屋構造を持つ土壌ではないかと考えられる。

覆土は黒褐色土、褐色土の二層に分けられ、カーボンや焼土を含んだ土層であった。また覆土上層から、多量の土器片を出土した。100を超える数の土器片が集中して出土している。しかし、この土器片のほとんどが、埋設された土器よりも古い、加曾利EⅡ、Ⅲ期の土器片である。土壌を埋める過程で、古い時期の土器片が混入したといまのところ考えたい。(宮野和明)



第8回 土壇 5、6、7 実測図

4 出土遺物

1 土器

第1号住居址出土土器 (第9図、第10図)

台付甕 (第9図-1)

高さ18.8cm、口径14cm、をはかる。甕の部分の深さは12.7cm、脚部の高さは5.5cmで底部径は7.3cmである。最大胴部は中央よりやや上部で12.7cmである。

胎土は良好で口縁部には、ヘラによる刻み痕があり、やや立ち気味の胴部に左から右にナデて、更に口縁部から底部にかけ全体に使用の際付着したススと焼けた痕がみられた。甕の内部にも右まわりのヘラ整形痕もみられた。脚部はスマートな形で指による整形がみられ、内側にも整形痕があり、ススも付着していた。台付甕としては、小形であった。

壺形土器 (第9図-2)

口縁部が欠損しているが胴部から底部が残存している。現存部で高さ7.3cm、最大径は胴部で12.1cmで、底部で6cmであった。

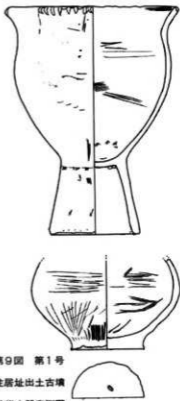
胎土は小粒の石が含まれているが、良好で硬さを感じる。右から左へ胴部にヘラミガキがみられ、底部には上から下へたてに同様整形がみられた。内側は、右まわりのヘラミガキで2~3cmの長さである。

底部に、3mm×5mmの楕円形の靨痕があった。

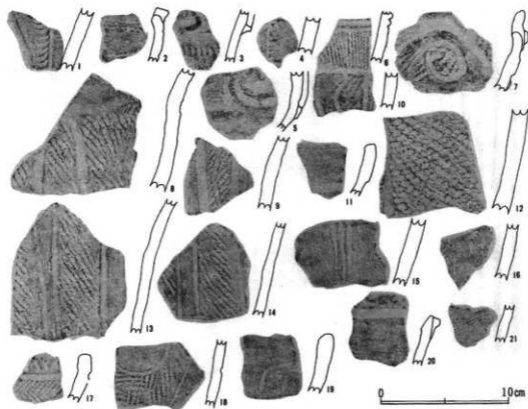
(落合 静男)

上述の古墳時代前期五領式土器のほかに縄文土器がかなりある。(第10図1~21)

1、4は勝坂式土器で、長方形区画の藤内Ⅰ段階の土器。2は区画に沿って幅広の爪形文を巡らす。2、3は阿玉台式土器。2は口縁区画に沿って2条の連続刺突文がみられる。3は口縁の楕円形区画、胴部は連続した爪形文が一周し、Ⅱ式に相当しよう。6~21は加曾利EⅡ式後半からⅢ式にかけたものが多い。5、6は加曾利EⅠ式前葉のもの。5はキャリパー形土器で、頸部に無文帯をもつ。7~16、20、21は加曾利EⅡ式後半の土器といえよう。7は口縁部で渦巻文は崩れている。8~10、12~15はキャリパー形土器の胴部破片。15は地文が条線で、他は縄文。R { L が多く、12は複部のL R Lである。11は円彩りの鉢形土器か。16はコンパス文状の楕目文の土器。20は頸部でくびれ、甕形を呈しよう。口縁部は無文で、口唇部に刻目が一周する。17、18は加曾利EⅥ式土器、口縁に沈線が巡り、無文帯に刻目を一周させる。沈線下は横位の縄文L { R、以下は縦



第9図 第1号
住居址出土古墳
時代土器実測図



第10図 第1号住居址出土縄文土器拓影図

位。18は渦巻状の磨消縄文帯をもつ。19は深鉢で、上端を連結した懸垂文が垂下する。

第2号住居址出土土器 (第11図1-2)

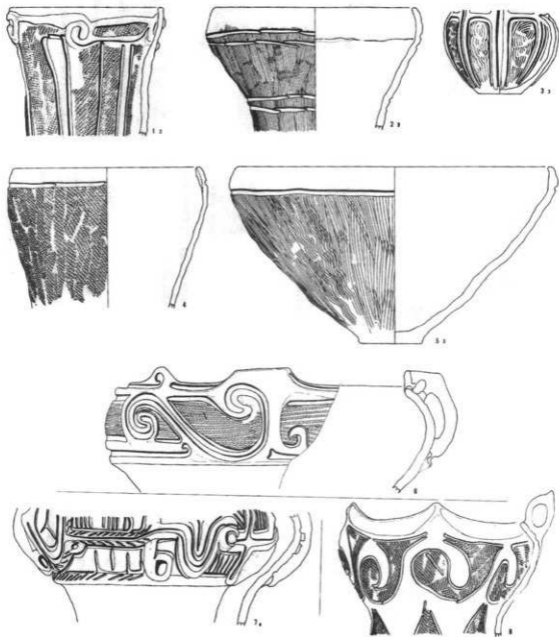
第11図1-2のが体土器以外は小破片が若干出土したのみである。

土器は小形のキャリパー形土器で、胴下半を欠失する。平縁で口縁は直行する。くびれは少ない。口縁部文様帯は4単位で、一条の隆帯による渦巻文と楕円形の区画だが、区画を欠部する部分がある。懸垂文は磨消しの懸垂文と沈線による懸垂文からなる。縄文はR { $\frac{L}{L}$ } の縦回転の焼成の良い土器で色調は明るい褐色を呈す。

第3号住居址出土土器 (11図2-3、3-3、5-3、第12図、第13図)

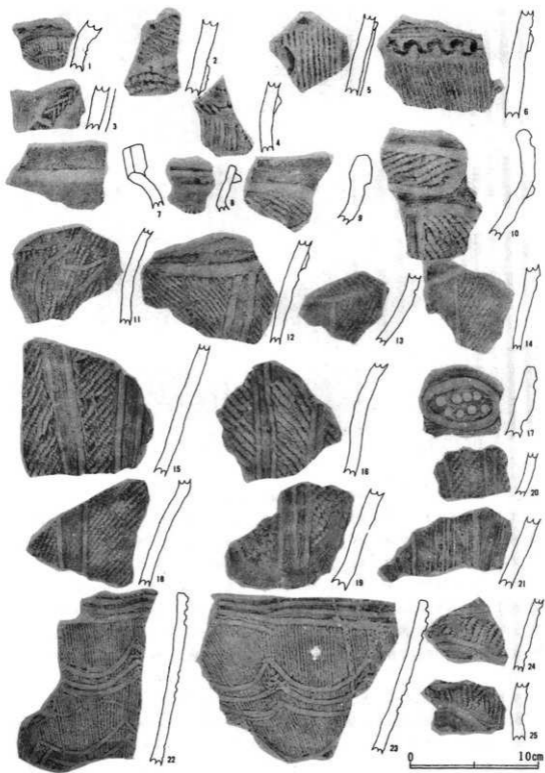
加曽利E III期の第4号住居址にきられ、2つの住居址が重複しているため、他の時期の土器がかなり混在している。住居址と直接関係ある土器としては西壁ぎわの埋壺(第11図2-3)があり、覆土からは3-3、5-3の土器がある。

第11図2-3は弧線文の系統を引く土器であり口縁部は開き、上端近くで内湾する。頸部のくびれは弱い。文様は地文の縦位の条線文の上に口縁部と胴部に二条の沈線が引かれるのみで弧線文は省略され、E II期のものと異なる。3-3は小形の壺であり、有孔鏝付土器の退化形式のものと考え

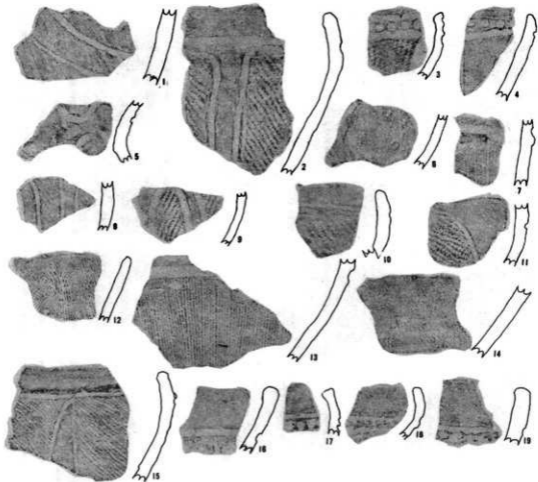


第11图 西康·大堰遗址出土石器实测图

- | | | | |
|-----|----------|------|----------|
| 1-2 | 第2号住居址出土 | 5-3 | 第3号住居址出土 |
| 2-3 | 第3号住居址出土 | 6-3 | 第3号住居址出土 |
| 3-3 | 第3号住居址出土 | 7-5B | 第5号住居址出土 |
| 4 | 第6号土坑出土 | 8 | 第5号土坑出土 |



第120图 第3号住居址出土土器拓影图

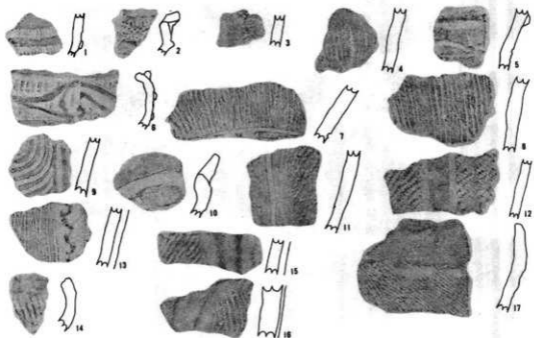


第13図 第3号住居址出土土器拓影図

るが、本例は口縁を欠失し、詳細は不明である。胴部には隆帯による懸垂文が垂下し、その間に櫛状工具によるコンパス状の文様を相対して並べた条線文がみられる。丹が若干残っており、丹彩の土器である。灰褐色を呈し、焼成は悪い。5-3は大形の鉢形土器で、底部から大きく開き、口縁で内弯する。口縁に沈線をひき、胴部には条線文が施される。一部に蛇行する条線が重なっている。灰褐色を呈するが灰黒色に近いところも多い。焼成はあまりよくない。6は覆土中に混在していたもので、多少の破片から復原実測した。加曾利EⅠ期前葉のキャリパー形土器。口縁には3個の小突起を渦巻から派生する橋状の把手がつく。頸部には無文帯を置く。地文は横回転の燃糸文しである。

第12図と第13図は覆土中から出土したもので、加曾利EⅡからEⅢ期にかけた土器が多い。

第12図1-4は勝坂式土器。1は楕円形と瓜形文を組合せたもの。2は縄文地に二条の刺突文のある隆帯を貼付ける。3は交互の刺突と矢羽状の細い沈線による刻目を入れる。4は刻目のある太い隆帯と区画間を沈線で埋める。5-8は加曾利EⅡ期前葉の土器。5、6はキャリパー形土器の胴部破片。5は隆帯の懸垂文。6は欠く。7は無文の浅鉢。口縁を肥厚させ、口唇を平坦にする。9-19は加曾利EⅡ式からⅢ式にかけた縄文を地文とするキャリパー形土器。9、10は口縁部破片。



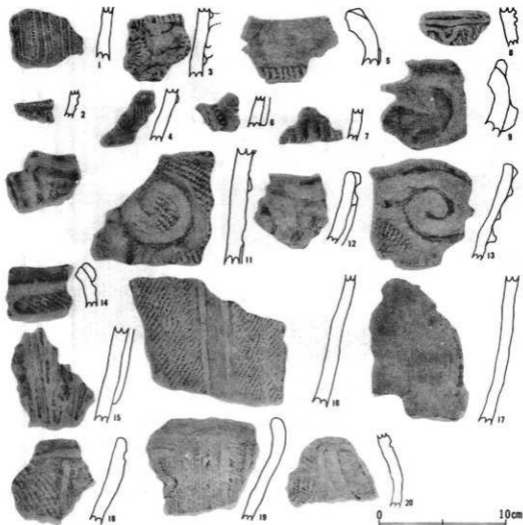
第14図 第4号住居址出土土器拓影図

渦巻状はかなり磨れる。13、14も口縁部文様帯の隆帯は消失し、沈線区画になる。12、15、19、20はキャリバー形土器の胴部破片。沈線で画される幅の狭い懸垂文をもつ。11は磨消し懸垂文間に文様を描く。17は波状の口縁部に円形指突を充填した楕円形沈線文がある。21は荒い柔線のキャリバー形土器。22～24は弧線文系土器。屈曲は少ない。24も弧線文系土器と思われる。弧線間を磨り消す。第13図1は曾利系の綾杉状の沈線をもつもの。2は深鉢で、磨消しの懸垂文以外の部分を沈線で連結区画したもの。3、4は口縁に円形刺突が巡る。3は口縁と胴部で文様帯が分かれるもの。5～9のような胴部となろう。4は無文地で、単純な沈線が垂下するだけであろう。7の渦巻文は形骸化している。10は胴部が縄文のみの深鉢。12は櫛描き条線文の単純な深鉢で、コンパス状の文様等を組合せている。13、14は条線文の鉢形土器。19は加曾利EⅥ式土器。口縁に微隆起と沈線が走る。磨消しの先端が尖角的なのがこの時期の特徴である。

第4号住居址出土土器 (第14図)

大半が発掘区域外のため、本住居址の土器として取り上げた量はポリ袋2つほどで、量は少ない。本住居址からは小形のコップ状の土器が出土したが、展示会の際紛失してしまったとのことである。加曾利EⅢ期に属するものである。

1～3は勝坂式土器。4～5は阿玉台式土器で、Ⅱ式頃のものであろうか。2は楕円形区画に沿って幅広い爪形文が巡り、その間を鋸歯状に結節状刺突文を配する。藤内Ⅰ期段階の土器と思われる。6～8に加曾利EⅠ期前葉の土器。キャリバー形土器である。6は口縁部に二条の隆帯による渦巻文があり、一部嘴状を呈する。7、8は胴部に懸垂文を有さないキャリバー形土器。9～13は



第15図 第5A号、第5B号住居址出土土器拓影図

加曾利EⅡ式土器で、9は太い棒状工具による渦巻文で胴部文様を構成する。10は波状口縁のキャリバー形土器。沈線のみによる渦巻文。11、12は磨消しの懸垂文のある胴部破片。13は曾利系のキャリバー形土器。14～16は加曾利EⅢ式土器。15、16は隆帯の両側に幅広いなで状の沈線が沿うもので、渦巻文や懸垂文を構成する。大木9b式の土器に近いものであろう。19は口縁部に幅広い無文帯を配したもので、縄文との境が微隆起伏を呈する加曾利EⅣ式土器の特徴的なものである。

第5A号、第5B号住居址出土土器 (第11図7、第15図)

第5A号住居址は第5B号住居址の上に貼床して石囲い炉をもつ住居址であるが、掘り込みが浅いため、プランは不明で出土遺物もまとまったものはなかった。第5B号住居址は第5A号住居址によって覆土上半は全て破壊され、炉体土器(第11図7)のほかはほとんど土器が出土していない。

第11図7は口縁部が内寄り、頸部でくびれる土器で、内曲の度合いが強い。本例と相似した土器

に大宮市八幡耕地第5号住居址出土のものがある。八幡耕地例と合せて復原してみると、4単位の突起が付されたもので、口縁部文様帯は2単位構成となる。図示した反対側に同一モチーフの文様がある。モチーフは突起頂部から垂下すると思われる隆帯下端は渦を巻き、中心を窪ませてある。この隆帯の左は二条の隆帯がのび、左端の大きな渦巻文がつく。渦巻文の中心は三叉文が配される。横に延びた隆帯の上下は縦の沈線が埋める。右側は波状と十字状の隆帯があり、更に波状のモチーフの隆帯につなぎ、末端は左端にみられるような垂下する隆帯となる。頸部は無文帯となる。やや脆い土器で、赤褐色を呈する。

第15図はほとんど第5A号住居址の覆土中から出土したものである。1～6は勝坂式土器。7が阿玉台式土器。1は縦長区画のみられる藤内Ⅰ期の土器。2、4もほぼ同時期であろう。ともに矢羽根刺突文がある。3～6は勝坂式の新しい段階のもの。7は胴部に爪形文が一周する。8～10は加曾利EⅠ式土器。8はくびれ部の破片である。9は浅鉢で丹が残る。口縁には隆帯による逆「S」字のモチーフが描かれる。11～17は加曾利EⅡ式土器。11は懸垂文から派生する一条の隆帯による渦巻文がある。12～14はキャリパー形土器の口縁部破片。12、13は楕円形の区画は退化して沈線区画となり、細い隆帯による渦巻文へ変化している。15～17は胴部破片で、16の地文が縄文であるほかは曾利系に近い土器であろう。18～20は加曾利EⅢ期の土器。18は口縁の直線下に磨消しの懸垂文が直下する。19も単純な深鉢形で、地文が条線文で、磨消しと波状沈線による懸垂文がみられる。20は頸部のくびれ土器で、沈線区画の磨消し文がみられる。

第1号土壇出土土器 (第16図1～5)

5が加曾利EⅠ式土器のほか勝坂期の土器である。1は沈線による三角形の区画に幅広い爪形文を配する。2は刻目のある隆帯と沈線を組合せたもので、勝坂期でも最も新しい土器。3は阿玉台Ⅱ式土器で、口縁の楕円形区画に沿って二条の結節沈線が巡る。4も阿玉台式的な胎土・作りを示す。横位の隆帯を刻む。新しい段階のものであろうか。

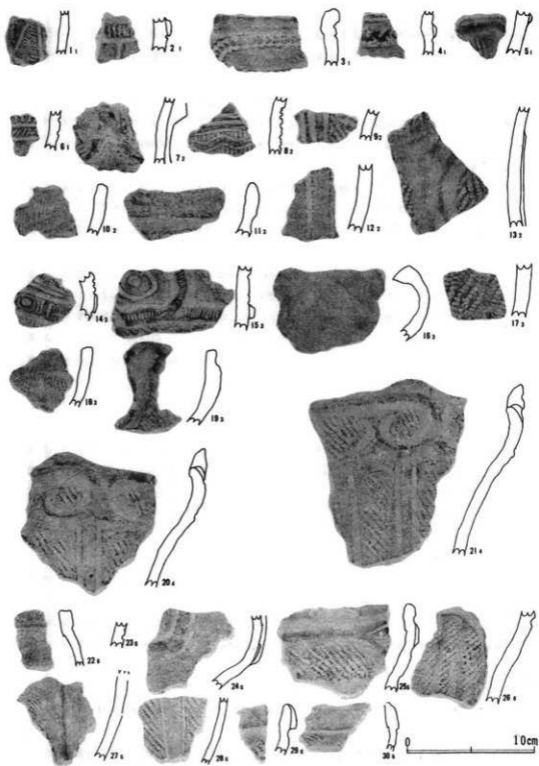
第2号土壇出土土器 (第16図6～13)

6は隆帯に刻目をもつ勝坂式土器。7は阿玉台Ⅱ式の胴部破片。隆帯の交叉する部分を一段高くする。隆帯に沿って二条の結節沈線が巡る。8は頸部に三条の平行沈線文、その下に三条の波状文が走る。地文は懸糸。9はキャリパー形土器の胴部破片。10～13は加曾利EⅢ期の土器。10は条線文のみの深鉢。11は口縁に横位の沈線が一条走る条線文の鉢。13は隆帯両側に幅広い沈線が走る。

第3号土壇出土土器 (第16図14～19)

14～16が勝坂期、17が加曾利EⅡ式土器、18が加曾利EⅢ式土器。19が加曾利EⅣ式土器であり、時代確定は困難である。

14の隆帯には連続刺突文、爪形文など細かな文様モチーフを描き、勝坂期でも古い要素もっている。13は横長の胴部文様帯で、隆帯により区画される。楕円形区画となろう。隆帯下は縄文。勝坂期でも新しい段階であろう。16は口縁部に無文帯をおく。18はコンパス状の条線文、19は把手部



第16图 第1、2、3、4、6号土墩出土土器拓影图

分で、中央を窪ませた該期待有のものである。

第4号土壇出土土器 (第16図 20、21)

21、21は同一個体、他には小破片があるのみであった。加曾利E II期後半のキャリバー形土器、渦巻部分は波頂部となる。4単位構成となろう。口縁はやや内弯し、屈曲は少ない。口縁部文様帯は陰帯による渦巻文があるが、楕円形区画は陰帯が消失して、なで状の沈線になる。胴部は幅の狭い磨消しの懸垂文が垂下する。地文の縄文はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ の縦位。

第6号土壇出土土器 (第16図22~30、第11図4)

22は阿玉台式土器。口縁の陰帯に沿って、沈線が引かれる。23は円形刺突を沈線による三叉状文を組合せる勝坂式土器。24は浅鉢で口縁に陰帯による渦巻文を描く。25は一朵の陰帯による楕円形区画がみられるキャリバー形土器。加曾利式土器。26は沈線で区画された部分にR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ の縦位の縄文が加えられる。29はキャリバー形土器の口縁か。縄文はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ で横回転。28、30は加曾利E III式土器。28は胴部下端の破片で急激に底部へ移動する。地文はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ の縄文。30は浅鉢で、地文は、L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ の縄文。27は微隆起による磨消し懸垂文が垂下する。加曾利E IV式土器の基本的な組合せの一器形である。

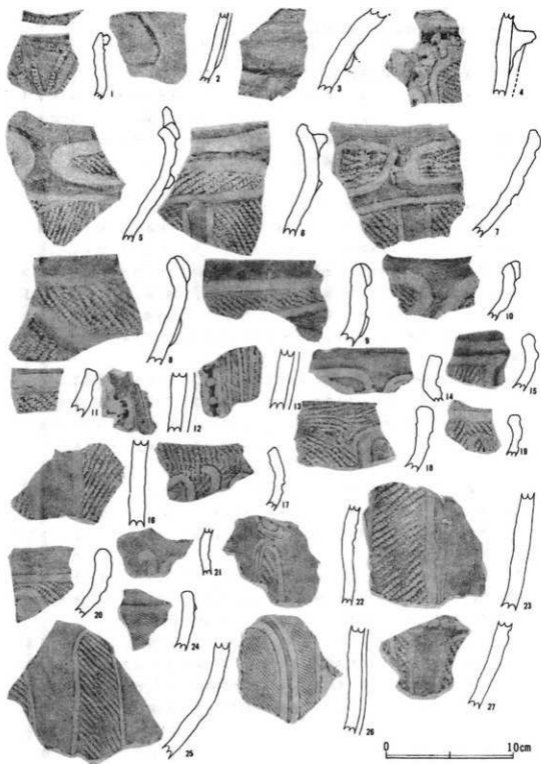
第11図4は口縁が内弯する単純な器形の加曾利E III期の深鉢。くびれはわずかである。口縁は無文帯を置いて、沈線が引かれ、以下全面縄文の土器である。胴下半が磨かれて縄文が磨消されている。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ 。口縁内面がやや肥厚しているが、断面観察によれば粘土紐を内側から貼付けており、内弯を強調するために行なったものであろう。黒褐色を呈し焼成のよい土器である。

第5号土壇出土土器 (第11図8、第17図、第18図)

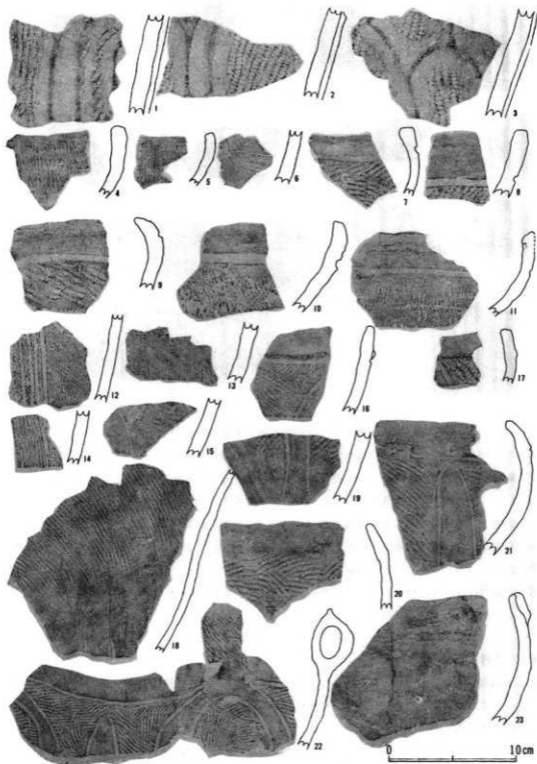
出土遺物は第11図8の胴下半が欠失する加曾利E IV式土器が正立で出土し、その下に第18図22の土器が散かっていたもので、土壌の時期は加曾利E IV期といえよう。しかし、その多くは加曾利E II~E III期の土器が多かった。

第11図8は環状の橋状把手をもつ4単位の波状口縁の土器。口縁は単位ごとに平らにした無文帯がある。胴部上半は「J」字状文が8ヵ所配され、下半は先端を尖らせた逆「V」字状の懸垂文を配し、区画に縄文を充填する。橋状把手に小形化し、縄文も省略されている。

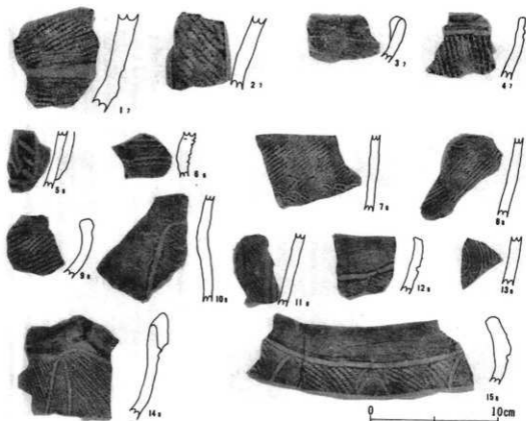
第17図1、2は阿玉台式土器。1は1b式的なモチーフだが、かなり変形している。2は胴部で陰帯が垂下する。3は加曾利E II期後葉の土器。2~14、16は加曾利E II式土器。全体に新しい要素が強い。5~10はキャリバー形土器の口縁部破片。曾利系のキャリバー形土器。14は浅鉢。16、23はキャリバー形土器の胴部破片。15は陰帯のわきに幅広ななで状の沈線が施される。大形の渦巻文を施す。同様なものに24~26があり、大形の土器に第18図1~3の土器があげられよう。17~22、23は口縁部文様帯が欠失あるいは簡略化された加曾利E III式土器。21、27は口縁部文様帯が残るか。深鉢が多いが、25は現存部からは鉢に近い土器のようであり、鉢とすれば珍しい。第18図4~6は条線文のみの深鉢。6は曲線的モチーフを描く。7、8は口縁に一条の沈線を引く。地文縄文の



第17图 第5号土坑出土土器拓影图



第18图 第5号土坑出土土器拓影图



第19図 第7号、第8号土坑出土土器拓影図

深鉢。9～11は一条の沈線の引かれた鉢。直線のもの9と波状条線のもの10とがある。12～14は深鉢で、地文が条線と沈線文のもの。加曾利EⅡ式に含まれるものもあろう。15～23が加曾利EⅣ式土器。16～17は口縁に一条の隆帯が巡る。16は口縁に沈線が巡る。21、22の土器は無文帯が丸くなるが、前者は無文帯部を平坦にする特徴がある。18は胴下半の大形破片。縄文以外は文様がなく、簡単に懸垂文が垂下する程度か。20は無文帯をおき、全面縄文の土器。口縁は平坦に仕上げる。22は第11図8と同様な器形をとるが、胴上半と下半の文様帯が分れる。円形になるように縄文を磨消す部分と鋭角的に切り込む磨消しにより連続したモチーフを描く。23は無文の土器で、口縁をなで平坦にし、頂部をつまみあげるようにしている。

第7号土坑出土土器 (第19図1～4)

1～4の全て加曾利EⅡ式土器である。1はキャリパー形土器の口縁部破片、文様帯の区画は沈線による。2は胴部破片。3は口縁部が内曲する土器で、口縁部は無文。4は弧線文系土器と思われる。地文は燃糸文。

第8号土坑出土土器 (第19図5～15)

7、8は器面全面に結束のある細かい縄文が施文される。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

前期末に比定されよう。5は刻目のある太い隆帯と沈線で文様構成したもので、勝坂末期の土器。6は二条の波状の沈線が施文された阿玉台式土器である。9は口縁部文様帯をもつ加曾利EⅢ期のキャリバー形土器。口縁部の縄文は横回転のL_R。10～13も加曾利EⅢ式土器。10は逆「V」字状の懸垂文が垂下する。11は幅の狭い懸垂文が垂下する。12に縄文の施行された鉢。13は同心円状の条線文の深鉢。14、15は加曾利EⅣ式土器。14は小波状口縁の破片。口縁は無文帯を置いて微隆起が巡る。先端の尖った懸垂文が垂下するか。15は口縁部に一条の沈線が引かれ、第18図21のように口縁部と胴部に文様帯が分れよう。

以上が今回の調査によって発見された遺構から出土した土器の概要である。そこで、いくつかの問題点を要約しておく。

本遺跡から発見された土器は縄文時代中期の勝坂式から加曾利E式にかけた土器がほとんどで、わずかに前期未葉ないしは中期初葉に比定できる土器が2片および第1号住居址から出土した古墳時代前期の五領式土器があるのみである。今回の発掘調査が台地の奥へかなり入り込んだ地点という点を考えれば、他の縄文時代各期の土器が発見されなかったといっても本遺跡の周辺にまったくなかったとはいえない。このことは、中期の集落規模が他の時期に比して大きいことを意味しているよう。

さて、横位の結節縄文を特徴とする土器としては中期初葉の下小野式土器があげられよう。又、佐津間山玉台遺跡（注1）のように前期末期に属するものもある。いずれにしても東関東地方を中心とするものであって、神奈川県東部の十三坊堤遺跡（注2）ではほとんどなく、室ノ木遺跡（注3）でも量は極めて少ない。中期初葉になってもこの傾向は同一である。本遺跡ではわずか同一個体の2片のみで、存在を確認するだけであった。今後、当地方の類例の増加をまちたい。

さて、本遺跡で発見された住居址は勝坂期終末段階から加曾利EⅢ期までであり、土壌としては加曾利EⅣ期の特異な例があった。しかし、覆土中やトレンチ出土の土器をみると、勝坂期の古い段階、少なくとも藤内I期段階の土器がかなりみられ、これに伴うと考えられる阿玉台式土器の出土もあり、本集落址においては少なくともこの段階には住居址が構築されていたことが知られよう。加曾利EⅠ期前葉から加曾利EⅡ前葉の間も同様にかなりの土器が出土しており、あまり断続をみせずに継続的に営まれた大規模な集落といえよう。

本遺跡で発見された住居址で最も古いものは第5B号住居址が挙げられる。炉に埋設されていた深鉢形土器は頸部に無文帯をおき、口縁部を2単位構成の刻目のある隆帯で、渦巻、十字、波状等のモチーフを組合せ、そのモチーフの間を三叉文や沈線で埋める手法がみられる。この土器に相似した例に大宮市八幡耕地遺跡（注4）がある。その例をみると、4単位の把手を付け波状口縁を作り出している。八幡耕地遺跡も本遺跡も同様に伴出した土器がなく、どのような土器と組合せになるか不明であるが、隆帯の手法や区画間の埋め方、三叉文の再登場などを考え合せれば、勝坂式土器のなかでも最も終末段階に属するものと考えられよう。

終末期の勝坂式土器と加曾利EⅠ期前葉の土器の伴出例が増加し、一般的傾向とすることがで

きる。これらの勝坂式土器をみると単独で出土する勝坂式土器に比べて文様の退化傾向は指摘できるが、その器形は藤内Ⅱ式土器以来の流れを汲むものがあつたり、又、勝坂期終末段階に出現してくる円筒形の土器があつたりして、本遺跡のように1個体のみの出土の場合はなかなか判別が困難な場合が多い。長野県では藤内期以後、井戸尻期を3分(注5)している。そのうち、井戸尻Ⅲ期は他の遺跡例をみると曾利Ⅰ式に平行する土器群と考えられるので、藤内期以後は2分されていることになる。関東地方の場合、同一範型の土器を少しずつ変化していることもあつてなかなか明確に分けられないでいる。本遺跡例では手法やモチーフから考え、加曾利EⅠ期前葉直前の勝坂期段階の土器と考えておきたい。

加曾利EⅠ期前葉から加曾利EⅡ期前葉の土器でまとまって出土したものはない。ただ、第3号住居址の覆土から加曾利EⅠ期前葉のキャリバー形土器が出土している。頸部にはかなり幅広い無文帯がある。岩の上遺跡(注6)等最も類例の多い土器に属するが、無文帯を置く土器はこの段階では比較的少ない。胴部に陰帯による懸垂文がつく可能性がある。完成品のキャリバー形土器は口縁部文様帯はかなり崩れ、一部楕円の区画を欠いている。又、本地域ではこの段階においては弧線文の土器が非常に多いのが通例であるが、本遺跡の場合量が少なかった。今回の発掘区域では本時期が中心でないことを示している。わずかな出土例のうち、第3号住居址覆土出土の弧線文の土器をみると、屈曲の少ない器形で、直線的に底部へ移行し、新しい段階のものであることを示している。

加曾利EⅢ期の良好な資料は第3号住居址の3個体の土器があげられる。破片の出土量も多かった。埋甕として第1図2の弧線文系土器があり、覆土中から3、5の壺形土器と鉢形土器の2個体が出土している。加曾利EⅢ期には定形的な弧線文の出土はほとんど知られておらず、ほぼ純粋な加曾利EⅢ期の土器が出土した新庄市内畑遺跡(注7)でもほとんどみられなかった。本遺跡例は弧線文土器といっても加曾利EⅡ期段階の弧線文土器とはかなり変っている。器形的には頸部でくびれるが胴部はあまり張らない小さなものとなる。文様は区画の沈線が太くなり、通常三条を単位とするが二条に変化し、弧線文も消失している。第11図3のような口縁部に無文帯をおき、沈線が縄文の胴部と区画される鉢は吉井城山遺跡(注8)で見られるように加曾利EⅡ式土器の重要な組合せの一つと考えられよう。有孔鋳付土器に変わって、このような小形の壺形土器の出現も加曾利EⅢ式土器の特徴の一つでもある。しかし、一方では覆土中からは口縁部文様帯をもつ加曾利EⅡ式土器のキャリバー形土器の流れを汲む土器もかなりみられる。最近、加曾利EⅢ式に属すると考えられる住居址の数が増加し、馬込遺跡(注9)第12号住居址や宮地遺跡(注10)第2号住居址は口縁部に文様帯を残す土器が伴出する良い例にあつたろう。又、加曾利EⅢ式土器および加曾利EⅣ式土器に特徴的にみられる胴部に横伏把手を有し、口縁部に無文帯をおく鉢形土器は加曾利EⅢ式段階では花影遺跡(注11)や内畑遺跡でみられるように、対になる横伏把手間の胴部に渦巻文を有することを常とし、加曾利EⅣ式土器の場合はほとんど消失している。このように、必ずしも口縁部文様帯の消失のみでは加曾利EⅢ式土器を決定づけられない。口縁部文様帯をもつキャリバー形土器も一つの流れの上から判断する必要がある。しかし、加曾利EⅡ式土器におけるキャリバー形土器のパラエティーが加曾利EⅢ式土器の段階でも統一されるわけでないで、新しい要素として

どのような文様構成で区別するかは資料の増加をまって検討する必要がある。

加曾利EⅡ式土器と加曾利EⅢ式土器は当然近接した型式に相当するわけで、連続した面が若干残されるが、その大部分においては新しい器種・文様をもつ土器があらわれてくる。更に、各地域において様々なあらわれ方を示す。坂東山遺跡(注11)A地点第27号住居址の場合は加曾利EⅡ式土器と加曾利EⅢ式土器とが一住居址の構築から埋没の間に変っていったことを示す好例といえるかも知れない。本遺跡の第3号住居址もこれに近い段階のものと考えることができよう。

最後に第5号土壇出土土器を検討してみよう。土器の説明の項でも述べたように、土壇の時期は正立して出土した第11図8の横状把手をもつ深鉢形土器及び、その土器の下に敷かれていた第18図22の同様な器形を呈する深鉢形土器の大形破片からその時期は加曾利EⅣ期の段階とすることができよう。そこで問題となるのは覆土中から出土した加曾利EⅡ式土器及び加曾利EⅢ式土器であろう。覆土中から出土したもので加曾利EⅣ式土器と比定できる土器は第18図15～22位なもので、多くはそれ以前の形式に属する。加曾利EⅢ式土器と加曾利EⅣ式土器について同一型式にみる見解(注13)があるが、最近の資料の増加は時間的差異が明らかになると共に住居址構造上においても大きな差異のあることが判明しつつある。本土壇の出土土器を正立の深鉢形土器と覆土中から出土した土器破片を一つの遺構から出土したということ同一時期の所産と考えることも可能かも知れないが、上述のような各地の出土例や覆土中の土器の中かなりの加曾利EⅡ式土器が含まれること、加曾利EⅣ式土器もかなり新しい要素が感じられる点があること、又、土器の出土状態も覆土中に散在していたことなどから、かならずしも加曾利EⅢ式土器とが加曾利EⅣ式土器の共存、同一型式を証明したとはいえないと考える。本例は土壇構築後、土壇の埋設してゆく過程において、何らかの理由により周辺の遺構から流入したものと考えておこうと思う。

(谷井 彪)

- 注1 下津谷達男ほか「佐津間山玉台遺跡」鎌ヶ谷町史資料集 昭和42年
- 注2 樋口清之、麻生優「十三菩提遺跡」神奈川県教育委員会埋蔵文化財調査報告2 昭和46年
- 注3 赤星直忠、塚田明治「横浜市室ノ木遺跡」横須賀考古学会研究調査報告2 昭和48年
- 注4 大宮市「大宮市史」Ⅰ 昭和43年
- 注5 藤森栄一編「井戸尻一長野県富士見町における縄文中期遺跡群の研究」昭和40年
- 注6 栗原文蔵ほか「岩の上、雉子山」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第1集 昭和48年
- 注7 谷井 彪「内畑遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査報告12 昭和45年
- 注8 岡本 勇「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(2)」横須賀市博物館報告第7号 昭和38年
- 注9 早川智明ほか「加倉・西原・馬込・平林寺」東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 昭和47年
- 注10 城近憲一ほか「宮地」狭山市教育委員会 昭和47年
- 注11 谷井 彪ほか「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 昭和49年
- 注12 谷井 彪・宮崎朝雄「坂東山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集 昭和48年
- 注13 堀越正行「加曾利EⅢ式土器研究史」信濃第24巻第2号～第4号 昭和47年

2 石器

この遺跡で出土した石器は、打製石斧（14点）、磨製石斧（1点）、挿器（2点）、石皿（2点）、凹石（1点）、磨石（4点）、石鏃（2点）がある。

これらの石器は、一部を除くとほとんどがトレンチから出土したものであるため、一応、全ての石器を一括して分類した。

I 打製石斧

打製石斧の出土量は14点で、他の縄文中期の遺跡と同様、打製石斧の割合は多く、石器総数の約60%を占めている。打製石斧もいくつか分類できるが、ここでは製作法から分類するには資料点数が少なく、主に形態の面で分類した。

A類（第20図 1～2）

平面形は長方形の謂ゆる短冊形の石斧である。長さは7～8cm、巾は4cm程の小型で薄型のものである。1～2とも第1次剥離面を残しているが、側面調整を行ない、特に1は、自然面をほとんど残さずに調整された形の整った石斧である。

B類（第20図 3～8）

A類同様な短冊形の石斧である。長さ9～11cm、巾4～4.5cmの縦長の厚みのあるものである。素材は、扁平な礫や円味を帯びた小礫を使っている。縦長の石斧を形作るために、縦に剥離した第一次剥離面を側面から大きく剥離しているのが目立つ。3～5の刃部は丸味を帯び鈍い。8は石材の質が良いところから剥離も鋭く、刃部を欠損しているが、鋭い刃部を持ったものであろう。

C類（第20図 9～12）

撥形をした石斧である。円礫を素材として、裏面に自然面を大きく残している。長さ8～12cm幅5～6cmの中型の石斧である。第1次剥離面を側面から調整し、9～11はやや挟り込みを持った形になっている。9、10は本遺跡の石器の中で最も形の整った石斧であり、刃部、頂部、側面ともていねいに加工している。

D類（第20図 13）

分銅型をした、部厚い石斧である。円礫を素材にして、粗く大きな剥離を行い、自然面を一部残している。刃部は部厚く、調整剥離も細かいが刃は鋭い。また、挟り込み部分も両側面に細かな調整痕を見せている。

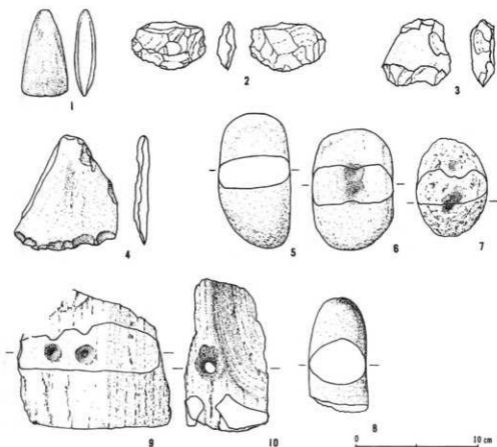
II 磨製石斧（第21図 1）

長さ7cm、厚さ1.7cm、刃部の幅3.8cmの定角状の磨製石斧である。器面は全体的によく研磨されており非常になめらかである。縦方向に規則性のある磨き方をしている。側面にも同一方向に研磨されており、側線も明瞭である。刃部も入念に磨かれていた。

3号住居から出土した。



第20图 石器实测图



第21図 石器実測図

Ⅲ 擧器 (第21図 2~4)

2~3は石質も良く、細かな剝離を行ない、いずれも刃部は鋭い。2は表裏とも全面に剝離を行ない、横長の擧器である。3は小礫を素材として、刃部と頂部に剝離を行なっただけで、自然面を多く残す。素材を生かした石器の作りである。4は石斧製作と同様な方法を用い、刃部に細かな調整を行なっている。2と3とは性格を異にするものであろう。

Ⅳ 磨石、敲石 (第21図 5~8)

磨石、敲石に類するものを一括した。磨耗痕、打痕を残すものであり、6~7は表裏に小さな凹みを持っている。6は側面に磨耗痕を、先端に打痕を顕著に残している。5, 6は先端に打痕を有している。7は石質が軽石状のもので、しかも凹みを持つ石器で類例が少ない。

Ⅴ 石皿 (第21図 9~10)

完成品は一点もなく、いずれも小破片である。9, 10とも凹み石にも使用し円錐状に凹みがあり、10は孔があいている。9はかなり大型の石皿のようである。(宮野 和明)

5 まとめ

西原・大塚遺跡における昭和48年度調査の概要は、以上、各章で述べてきた。ここでは4章で土器について考察を加えてあるので、土器についてのまとめは略し、その他いくつかの問題をあげたいと思う。

西原・大塚遺跡は武蔵野台地東縁に立地する、縄文時代中期、古墳時代前期の集落址の一つである。遺跡は柳瀬川の開折谷に面した台地上にあり、遺跡の背後は広く平坦地が続いている。集落を構えるに適当な立地条件にある。

遺跡の規模は広く、ほぼ200m×350mの範囲に及ぶであろうと考えられている。今回、調査した面積は120㎡の極く小範囲であったため、縄文時代中期の住居址5軒、土壇10、それに古墳時代前期の住居址1軒を確認したにとどまった。

集落の存続年代を示す土器型式は、縄文時代中期の勝坂式から加曾利EⅣ式にかけた土器がほとんどで、縄文時代前期未葉と、古墳時代前期の五領式土器があるのみである。今回の調査は、発掘区域が極く限られた一部分であるので、他の時期の土器が発見されなかったからといって、他の時期の集落が、周辺にまったくなかったとは言えない。それだけ縄文時代中期の集落そのものが他の時期に比して大きいことを意味している。

ここで、縄文時代中期に限ってみると、中期、勝坂期の古い段階から、中期後半の加曾利EⅣ式にかけての土器が断続をみせずに出土しており、かなり継続的に営まれた規模の大きい集落址といえよう。

さて、今回発見された住居址のうちで、最も古い段階の住居址として、5号A、B住居址があげられる。この住居址は建直しが行なわれたと考えられるもので、一方の埋燵がに側石を伴う炉を廃棄して、他方、新しく石囲炉に変えた上に、柱穴も掘り改めている住居址である。この5号住居址のような建直しを行なったと思われる例として、所沢市勝棚遺跡8、12号住居址などがこれにあてらう。

5号住居址は1戸、単独の状態が発掘されたが、加曾利EⅢ式の時期にあたる3号、4号住居址は切り合い、重複していた。この遺跡は比較的長期にわたって占拠されたことから、生活の活動範囲は広い。しかも住居址同士の切り合いが行なわれているものと思われる。なお3号住居址には埋燵が設置されていた。

土壇についてみると、今回の調査で、計10ヶ所確認されたが、住居址群と近接ないしは、重複しており、この遺跡は、集落と土壇群とが、区域を同じにして、加曾利EⅢ期になっても、土壇群は住居構成地域から分離していないようである。

土壇の中には、集落に付随した遺構と考えられるものもあろうが、従来の類例からみて、土壇5、6、7は、墓址と考えられよう。特に土壇5、6については埋設土器を有し、土壇5については、土壇の形態、土器の埋設状態からして、燵の初源的な特徴の強いもので、墓址として考えてよい

ものであろう。また、この土壌は土壌内に柱穴が規則的に並び、上屋構造を持つものかどうか、断定できないが、先きのことを考え合せ、特異な土壌（墓址）であることは言える。

最後に、古墳時代前期の集落の存在を確かなものとした1号住居址について述べると、この住居址は、多量の炭化材を床面から検出しており、火災にあった住居址であることを付け加えておく。

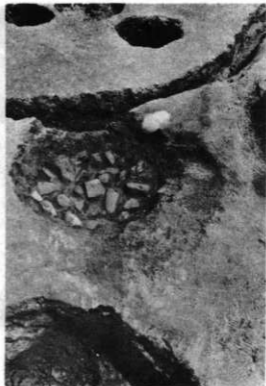
以上、今回の発掘調査によって、明らかになった部面も少なからずあったが、この遺跡の規模の大きさからすれば、わずか、小範囲にとどまり、多くの問題（例えば、集落の形態等）点を残している。更に今後の継続発掘調査、に待ちたい。（宮野和明）

引用、参考文献

- | | | | | |
|----------|----------------|------------------|------------|-------|
| 谷井 彪 | 〔内畑遺跡発掘調査報告〕 | 埼玉県遺跡調査会報告12 | 昭. 45 | |
| 嶋崎弘之他 | 〔膳棚〕 | 鳳翔7号 | 埼玉大学考古学研究会 | 昭. 45 |
| 谷井彪、宮崎朝雄 | 〔坂東山〕 | 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第2集 | 昭. 48 | |
| 肥留間 博他 | 〔中山谷〕 | 小金井市文化財調査報告書1 | 昭. 46 | |
| 肥留間 博 | 〔狭山・六道山・浅間谷遺跡〕 | 東京都瑞穂町文化財調査報告1 | 昭. 45 | |



1号住居址



7号土塚

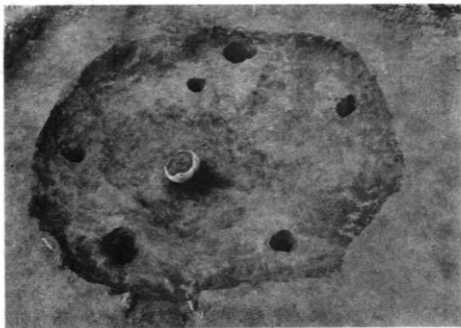


3、4号住居址

図版1 第1号住居址、7号土塚(集石を伴う)、第3、4号住居址



5 A、B住居址



5号土坑

图版 II 第5 A、B住居址、5号土坑



5号住居址(伊体土器)



2号住居址(伊体土器)



3号住居址(埋壘)



3号住居址出土土器



← 3号住居址出土土器



↑ 4号住居址出土土器



5号土壇出土土器

図版Ⅳ 住居址、土壇出土土器

昭和 50 年 3 月 28 日発行

昭和 59 年 3 月 31 日再版

発行者 埼玉県志木市教育委員会

電話 0484(71)3111

印刷所 創芽企画株式会社

